Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-05

ニーチェのカント観について（その2）

栃木，亨

(Citation)
兵庫農科大學研究報告．人文科学編,7(1):1-7

(Issue Date)
1965

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81006209

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006209

ニーチェのカント観について　その二

栃木　亨

「人間的な、余りに人間的な」(Menschliches Allzu Menschliches) は内容においては従来の価値体系の土台を覆えそうとし、形式においては散乱するアフォリズムの形をとり、特異、難解の書の一つと云っても宜かろう。幸いこの書にも一八八六年に附せられた彼自身の手になる序文がある。彼の自序は後年の「この人を見よ」(Ecce Homo) が典型を為すように、男らしい、けれんのない自己省察と云うことが出来ると思う。そこには彼の思索の本質をなす誠実、公正、繊柔が支配している。この小文においても彼自身の序文を手引にこの特異な書に近づくことにしてみたい。「人間的な、余りに人間的な」は彼によって自由精神の書と規定されるが、自由精神は先ず自己解放から始まるのである。と云うことはその精神は解放以前においては、それだけ一層束縛された精神 (um so mehr eingebundener Geist) であったことを意味する。ニーチェによるならばこの精神にとって「殆ど断ち切り得ない絆」と思われるものは「若い心に持前の畏敬の念、古来崇められて来た尊厳なものに対する気おくれや心づかい、自分の育った土地や自分を導いてくれた手や自分の礼拝することを覚えた聖壇に対する感謝の情」であって、これは「高級で選りぬきの品種の人間」にとっては義務とも感ぜられることであった。高級で選りぬきの品種の人間にとって義務とも感ぜられる絆と云う時、私はこの言表の奥に潜むニーチェの原体験として、父なき後の牧師館に母と姉とにはぐくまれて育った清純そのものの幼少時代と、かくして極めてセンシブルな感受性を特質とするに至った彼の青年時代を想起せずには居られない。この清純鋭敏な感受性の故にショーペンハウエルやヴァグナーに対するひたむきな傾倒があったのであろう。高級で選りぬきの品種の人間にとって断ち切り難く思われる絆とはこのような鋭敏な感受性とその故の熾烈な傾倒の情熱を指すものと云ってよい。この故に彼は「彼等（束縛された精神）の知った最高の諸瞬間こそ却って何よりかたく結びつけ、何より長い義務を負わせるであろう」と述べるのである。しかるに「そのように束縛されていた者に大なる解放は地震のように不意に見舞って来る。若い魂は一ゆるぎで震駭され、もぎ離され、根こそぎにされる。何ごとが起ったと云うのか自分でも分らないのである。(前段) 一つの駆り立てる力、押し迫る力が働いて、命令のように彼に君臨する。どこか知らず、何を賭しても進んで行こうと云う意志と願が目ざめる。未発見の世界を求める性急な危険な好奇心が、彼のあらゆる感覚に炎となって燃えゆらめく。(後段)」これが彼の叙述による自己解放の始りである。引用文前段では束縛された精神が地震におそわれるように一挙に繋縛を解かれて茫然自失する様が描かれるが、私はその背後をより具体的に、束縛された精神の一途な傾倒を支えていた鋭敏な感受性と熾烈な情熱が当然来るべき反動、深刻な幻滅におそわれたものと見たい。しかしながらニーチェの場合幻滅は単なる情念の上の反動、破綻に止るものではあり得なかった。そこには同時に対象の実態を見抜こうとする認識の意慾が伴っていた。引用文後段はこれを指すものと思われる。私はニーチェの述べる束縛された精神の自己解放を、鋭敏な感受性による一途な傾倒が幻滅を機として離反したものであり、しかもこの幻滅の背後には破綻した情念の背反のきびしさとたじろぐことのない認識の意慾が相即し、相乗する唇歯の関係をなして潜んでいるものと見たい。幻滅の情は対象の正体をえぐり出してやろうとするであろうし、かくの如き対象の直視は幻滅の情をいよいよ深めるものとなるであろう。以上のような自己解放の経緯から自由精神には次のような独特の様相がつきまとうこととなる。先ず「彼の愛していたものに対する突然の驚愕と猜疑。彼にとって義務と称せられていたものに対する侮蔑の電光。放浪、異境、疏隔、冷却、平静、氷結に向って焦立つ不逞な欲求。愛に浴びせかける憎悪。これまで崇拝し愛して来たところ

に向っての神殿冒瀆に似た手荒さや眼つき」と云う「性の悪い痛ましいものが大いなる解放の歴史に含まれる」のは情念の面における従来の畏敬、愛情に対する反動を示めすものである。続いて「自ら決定し自ら評価しようとする力と意志のこの最初の爆発、この解放は同時に人間を破壊しかねない一つの病気である。そしてこの放たれた者、解かれた者がこれから先事実に対する自分の主権の証しとしようとする様々な奔放な試みや奇抜な真似には如何に多くの病気が現われて来ることだろう。彼は鎮められぬ慾望を抱いて、残忍な面持で徘徊する。彼の獲物となったが最後、危険なまでに緊迫した彼の誇りの血祭りとなるのを遁れられぬ。彼は自分を魅するものを引き千切るのだ。覆い包まれ、羞恥によって庇われているものが見つかり次第、凶悪な笑を浮べてひっくりかえす。裏返しにしたらこれらの事物がどんな風に見えるかやって見るのだ」とは前述の反動の遂行を可能ならしめる認識意慾の徹底性を示すものである。ここから知られることは、この自由精神の書「人間的な、余りに人間的な」は従来の価値体系の覆滅を目指すと云っても、それが反動のなさしめる試み、彼の所謂「恣意、恣意の道楽」であることを免れぬことである。この書が決して体系的論述ではなく寧ろ恣意の試みであることに留意しなければならない。この書を体系的に要約することによって理解しようと試みるならば人は内容においても形式においても恣意的なその試みの内に己れの位置を見失って了うであろう。単なる非道徳或いは無道徳の独白の感を免れ得ぬこととなるであろう。この書はニーチェの試みに即して、そしてその恣意を念頭において理解するのでなければならない。先ず当時のニーチェの幻滅のショックを実感し、ついで幻滅による裏面暴露の恣意の内に彼が実態として見抜くところを知り、最後に彼がこの実態を踏まえた上で己れの拠りどころを得ようとして模索するところを探るのでなければならない。この書においては勿論裏面暴露による実態直視に主力がおかれているが、その実態の上に立って自己の道を模索しようとする彼の試みにも注意が払われなければならない。この段階に移る時彼の認識能力は裏がえしにして事物を見ようとする性急な徹底性から転じて、生来のセンシビリティによって微妙なバランスをとりながら、生の深所の隅々まで滲透した認識を得ようとする。彼の所謂「遠近法的な視野、視点」とはこのことを指すのであろう。幻滅のショックを機縁としながらも生の実態を踏まえた遠近法的視野の微妙なバランスの内に、一見主観的な彼の思想を支える客観性が存する。このバランスの実感によって彼の予感する建設的要素を推測することがこの書理解の第二の要諦であろう。さて本書第一章は「最初にして最後の事物について」と題される。その内容はニーチェを形而上学の束縛から解放することを意図するものである。自由精神の解放が生の根底よりなされる地すべり的震駭である以上、それは事柄自体の順序に従ったものと云えるであろう。ニーチェの実感の順序に従って先ずまとめられたアフォリズムが形而上学打破の第一章をなすのである。

ニーチェによるならば形而上学について容易に見出すことの出来る迷妄は先ずそれが現在の人間から出発してこれを分析することで目標に行き着けるものと思い、無意識の内に現在の人間を一つの永遠の真理、あらゆる渦動の中にあって同一不変のもの、確実な事物の尺度と見做すことである。人間も認識能力も生成して来たものであり、生成中の一駒にすぎないと云う歴史的意識を欠いている。このような人間像の見誤り、誤った人間中心の思想は次のような形而上学の迷妄を生むに至る。即ち或るものは全世界を現在の人間の認識能力から紡ぎ出そうとし（観念論）、或るものは現在の人間の本能を人間不易の事実、更には世界理解の鍵の一つと見做して、現在の人間を世界の万物が初めからそこを目指して進む永遠の人間として語ろうとする。（目的論）ニーチェにとっては形而上学のこれらの余りに近視眼的な人間中心主義、得手勝手な「象徴や形式の紡ぎ出し」はすでに滅幻のショックを与えるものであったと思われる。しかるに彼の認識はこのショックを機として更に一歩を進め、このような迷妄が横行し得るのは生の表象世界がすでに不可避的な錯誤の迷妄によって成り立っているからであるとなすのである。つまり形而上学は生の錯誤の迷妄を自己に都合よく歪曲したものと見るのである。生の不可避的錯誤の迷妄として基本的な例をあげるならば、言葉は事物に与えられる記号に過ぎないのに人間は言葉を持つことは世界の認識を持つことであると思い誤まる。又言葉の単一は決して事物の単一の保証にならない。後者は百の源泉と支流を持つ河であるにも拘らず人間はとかく思考の範囲を言葉の範囲に限ろうとする。論理学も現実世界に存しない仮定、例えばいくつかの事物の等しさとか、相異る時点における同じ物の同一とか云う仮定を基礎にしている。数学も同様である。自然界には正確な直線も、実際の円も、絶対の大きさ（absolutes Grössen-mass）も存在しない。そもそも物（Ding）そのものが人間が太古以来その存続

を仮定してきた信仰（Glaube）にすぎないのである。生の表象が生の生成を固定し、図式化して得られる限り、表象世界は非存在を存在とする錯誤を免れず、迷妄と妄想の成果と云われることも止むを得ないのである。形而上学の迷妄はこのような表象世界の解釈、歪曲として、生の不可避的錯誤の迷妄にその由来を求めることが出来る。例えば現象とその充足理由としての物自体と云う時、両者をあたかも完成、固定したかの如く立言することは現象が生成中であることを忘れた迷妄である。物自体も現象の充足理由を求める人間の迷妄が作り出した信仰にすぎない。意志の自由は個人が先ず感情を頼って事柄自体の聯関の反省を後にする傾向があるために、自身の感覚、或は変化を内から起るものと見るところから生じる迷妄である。空腹感を有機体が保存されたがっているとは考えず、その感情が自身の内から湧くと思う。感情の故に自己を孤立化して見、かくして自己を気ままなもの、自由なものと思うのが自由意志の信仰の由来である。これに対して実体の信仰は、植物にとって通常万物が静謐、永遠で、すべての物が不変の自己を守る関係に立つように、人間にも下等有機体の時期以来同一の物があると云う信仰が遺伝されて来たことに基く迷妄である。このように形而上学の迷妄を生の錯誤の迷妄にさかのぼって摘抉した後にニーチェは形而上学を「人間の根本的迷妄について根本的真理であるかのように取扱う学」とまで極言するのである。このことは形而上学の、情念に基く第二の迷妄の面を展開することとなる。即ち錯誤の迷妄の上に立ちながら根本的真理を装わんとする情念の迷妄である。形而上学の所謂「深い」思想も真理には至って遠いものであり得る。この場合「深い」とは思想に伴う感情の「強さ」であって、これが認識の保証となり得ないのは、強い信仰が証明するのは自己の強さばかりで、信仰されるものの真実ではないのと同じことである。それは情念の迷妄によって錯誤の迷妄の上塗りをすることである。形而上学は錯誤、情念二重の迷妄の上に立つ。しかしながら錯誤による迷妄が生に不可欠であることは前述のとおりであり、却ってそれは生の経験を可能ならしめるものであった。論理学も数学もこの迷妄の故に成立したものであった。されば形而上学的表象も同じ迷妄のなせる業としてその発生の所以は理解し得るのである。更にその情念の迷妄も例えば永生の信仰の強さが如何に永続的事業の基礎になるかを思う時、これ亦生に貢献し得る面のあることを否定出来ない。しかしながら形而上学の成立した所以を理解することはこれの歪曲された本質を肯定することではない。この書においてニーチェのなしたところは形而上学の迷妄を打破することであった。しかしこのことが生の根本に立ち返ってなされたところからその省察は自ら形而上学に代るべき根本的な態度の予感に導かれるに至った。この章の最後において人間生活全体は前述の迷妄のため深く不真実の中に沈められているがこの迷妄を自覚する云わば「純化する認識によって、様々な人間、風習、法則、伝統的評価等の頭上を自由に怖れなく漂游し、ますますよく認識せんがためにのみ生き続けようとする境地」が述べられているのはこれに当るものであろう。

次に道徳の迷妄について彼の説くところを述べよう。一切がすでに仮象であり迷妄であるとするならばそもそも善悪の絶対的差別を設けてあげつらうこと自体がすでにナンセンスとなる。夕立が我々をぬらす時、自然の悪をとがめようとしないのはそれが必然の現象なことを知るからである。善悪を断じるのは必然ならぬ意志の自由を前提とする。しかるに意志の自由が個人の迷妄にすぎないことはすでに述べたとおりである。即ち一切は必然の生成なのである。滝を眺めて波の数限りなく屈折し、うねり、砕け散る有様に意志の自由と気ままを見るように思っても、どの運動も数学的に算出でき、一切の運動は必然の現象である。人間の行為の全体を予知するだけの全智がなく、個人が意のままに振舞うと錯覚するだけで実は必然の生成なのである。一切が必然で意志の自由もないとするならば善悪を断ずる道徳は迷妄の業と云わざるを得ない、従って善悪を分つ道徳の基準が流動、相対を免れないことは、例えば正義よりも復讐を選ぶことが曽っては善とされ今は悪とされるが如きである。或いは個人の殺人は悪となるが、国家の殺人は是とせられるが如きである。更に又善悪は行為の結果ではなく意図によって決めなければならないと云うが、動機や意図が単純、明瞭なことは稀である。時には記憶までが行為の結果に曇らされて、自分の行為に自分で嘘の動機を忍ばせたり、枝葉の動機を根幹として扱ったりする。成功は度々或る行為に良心の晴れやかさを与え、失敗は最も尊重すべき行為の上に良心のやましさの影を投げる。これらの事情は善悪の断定が意図について錯誤の迷妄を免れないことを示めすものである。又善悪を為さしめるものが必ずしも善意志ではなく、その背後に賞讃を求める虚栄心、或は叱責を恐れる怯懦心をまじえるのが普通である。道徳的行為の主要徴候をなす「非利己的行為」も例えば母親が子供に食物をさき与える行為のように、自分

の実体を分身させてその一方をもう一方の犠牲にするもので結局は変形された自己愛にすぎない。このように見て来るならば虚栄心、怯懦心、自己愛と云う情念が道徳的行為の発条をなしていることが分る。善に駆り立てるものは実は情念の迷妄なのである。逆に悪をなさしめるものは必ずしも純粋の悪意ではない。悪しき結果も正当防衛の場合には承認される。しかしどのような行為も終局的には正当防衛と云い得ない行為は存しないのである。又如何なる行為も悪意のない時は悪とならない。医師セルヴェを火あぶりにしたからと云ってカルヴィンを咎めることは出来ない。それは彼の信念から発露する筋の徹った行為であったのである。しかし仮に悪意があったとしても、その悪意の目ざすものは他人の苦しみそのものではなくて行為者自身の楽しみである。他人をいじめるものは自分の力の誇示と確認と云う自己満足を求めているのである。この悪をなさしめるものも亦錯倒した情念の業である。かく見て来るならば道徳の規定するような絶対或は純粋の善悪は存在せず、それは人間の錯誤と情念の迷妄の上に立つ信仰にすぎない。しからば善と云い悪と云う道徳の真の実態は如何なるものであろうか。善悪の評価の根底をなすものは神意でもなく、絶対的道徳律でもなく、風習（Sitte）である。風習、つまり古くからの掟やしきたりに従順なことが善であり、これにそむくことが悪である。なぜ風習への従順が要求されるかと云えばそこに共同体保存の本能が働いているからである。人類のもっとも原始的な状態においては快感を共にすることから社会的本能が生じた。例えば夫婦共同体の如きである。社会的本能は共同体保存の本能を導く。つまり風習の根底には快感の共同があると云える。ニーチェはこのように善悪の実態を快苦の本能に立ち還らしめる。そしてこの事実を紛飾する道徳を迷妄となすのである。彼の道徳批判も亦生の根本に立ち還った迷妄打破と云うことが出来る。さて善悪の実態は風習への順、不順であるとするならば、善悪は適応の適、不適として正邪の種的対立ではなく程度の差であると考えられる。善行、悪行を分つものは風習の尺度に適応しながら出来る限り多くの自己満足をかち得ようとする判断力、賢愚の能力である。善行は昇華された悪行であり、悪行とは愚鈍にされた善行である。現在の我々のあらゆる善行も現在の知性の最高度が抜き越される将来においては偏狭軽卒に見える時が来るであろう。現在の人類の道徳は前述のように自由意志と云う錯誤の迷妄を前提とし、その基準の成立と適用において流動、相対と云う錯誤の迷妄を免れず、その行為の遂行において虚栄、自己愛と云う情念の迷妄を避け得ぬものである。しかもなおこれらの迷妄も亦人類が現在程度の自己照明と自己救済に達するための唯一の手段であったのである。しかし道徳の領域も生成して来たものであり、変り得るものである。ニーチェはこの章の最後において人間の誤った評価をなし、愛し憎む遺伝的習性も次第に生長する認識のもとに弱められるであろうと述べ、一切の必然、無垢を認める新しい認識によって現在のやましい良心をもつ道徳的人類が一切を達観する賢明な人類に生長する日を希求している。

ニーチェによるならば宗教は根本的には願望によって生ずるものである。例えば原始人にあって宗教的礼拝は自然を人間の利益のために規定し呪縛しようとする願望から生じたものでその故は次の如くである。原始人には自然的経過の観念は全く欠けていた。一つの季節、日光、雨は来るかも知れず、又来ないかも知れなかった。彼等には凡そ自然的因果律の概念が存しなかった。舟を漕ぐ時、舟を動かすのは漕ぐことではなくて、漕ぐことはただそれによって何かの魔神に舟を動かすように強制する一つの魔術の儀式にすぎないのである。かくて彼等にとって不可解な、恐しい、神秘な自然は「様々な恣意の業の巨大な複合体」、「超人的な存在段階」、「神」として見えざるを得なかった。しかも彼等は自分達の生存や幸福が自然の巨大、不可解な恣意に依存することを感じた。そこで彼等は弱い種族が強い種族を懐柔する時の智慧にならって祈願や貢物、つまり追従的に祭り上げることによって自然を操縦しようとし、次には自然に対して義務を負い誓言をなすことによってこれを契約的に束縛しようとし、最後に魔術、魔法をかけることによって自然を呪縛しようとした。これらすべての儀式が次第に整えられるにつれて原始人の宗教的礼拝は成立したのである。即ちその宗教の底にあるものは原始人の自然に対する願望と云わなければならない。その願望の故に自然的因果律に代置された錯誤の迷妄が原始人の宗教である。宗教の成立が願望による錯誤の迷妄にあることは現代においても同様である。人間はその存在の有限性の故に自己の不全低劣を嘆く沈うつ期のあることを免れない。この時に思い浮べられる円満具足の全く非利己的なる存在が即ち神性である。この明るい鏡を見入る時自己が汚濁の存在に見えることは当然であるが、これが即ち罪責の体験である。しかるにこの神性はすでに人間の錯誤の迷妄がでっちあげたものである。何故ならば全く非利己的な最高の道徳性の存在することは次のことから不可能だからであ

る。先ず第一に凡そ他人のために何か善きことを為し得るためには、自分のために非常に多くのことを為さなくてはならず、第二に愛と犠牲の行為がなされるためにはそれを受納して飽かないエゴイストの存在が前提されるが、最高の道徳性が存在するために不道徳性の存在が必要となることは最高の道徳性を消滅させることとなるからである。このように神性がすでに人間の錯誤の迷妄の結果とするならば、この迷妄の鏡に照して自ら苦しんだ罪責も亦錯誤の迷妄と云わなければならない。さて人間にとっては先の沈うつ期と同様に自己に満足する昂揚期の訪れることも必然である。しかしながら彼にとってはこの新しい自己尊重が容易に信じられない。曽つて罪責の体験の内に神の怒りを見たように今度は神の慈悲を引き入れて解釈しこれを恩寵と見做す。彼が恩寵とか救済とか呼ぶものは実は自己恩寵、自己救済なのである。これ亦錯誤に基く迷妄と云わざるを得ない。このように宗教の諸現象は願望を原理とし認識をはなれて情念につかんとするものである。情念の奔放、「放電」によって、もっとも宗教的と云われる現象の解明されることは次のとおりである。例えば宗教的道徳性の一にあげられる禁慾も人間が支配慾の対象を外に求めず内に求めようとするところに生じるものである。それは自己自身の分身に加える暴虐の逸楽とも云うことが出来る。同様に大きな自己否定、自己犠牲が永続して習慣となる時それは神聖の境地となるが、これとても激情のなせる業と云い得るのである。即ち高度の昂奮、猛烈な感激の影響のもとにあってはとにかく偉大なもの、猛烈なもの、途方もないものを欲する。その時自分自身の犠牲が他人を犠牲にするのと同じ位に、或はそれ以上に自分を堪能させることに気がつくと自己犠牲がなされるのである。この場合本当に肝要な事柄は自分の感激の放電なのである。自分の緊張を軽くするためには敵共の槍ぶすまを総づかみにして自分の胸にえぐりこむこともあり得る。自己犠牲は自己の否定、もっとも克服し難い敵の克服として道徳的なものの絶頂と見做されている。しかしそれが感激の放電の内になされる時は偶然的になされたとも云い得るのである。激情から醒めた時、行為者は先の瞬間的道徳性にもはや得心が行かなくなるが、さきの行為を目撃した人々の讃嘆が彼にその行為を続けしめる。激情も讃嘆も衰えた時には誇りが行為者の慰めとなる。禁慾、神聖の宗教的現象をあらしめるものも亦情念による迷妄と云わざるを得ない。宗教のもつ異常に強い影響力、伝播力も教祖に対する信徒の錯誤と情念の迷妄によるものと思われる。教祖の影響力のもととなるものは彼が事実あるところのものではなく、彼が信徒に意味するところのものである。信徒の誤った解釈は教祖を超人的存在に祭り上げ、その教説に対する盲目的信仰を生むに至る。この盲信は自己の誤解も教祖の弱点も知らないものであるから教祖以上の影響力、伝播力をもち得るのである。理性的思考を去り、情緒の昂進を計る配慮は常に宗教の形式に伴っている。教会建築、教会音楽、僧侶の読経皆然りである。このような礼拝の形式の内に、深く悔恨に砕かれ又希望に恍惚とする宗教的情緒が深く人間の心に植えつけられる。かくして心情を牙城とする宗教は覆えしがたい伝統の力をもつに至る。心を悦ばすことが亦真実であるように願う心が知るよりも信ずることを欲するからである。宗教を成立させるものは願望に基く錯誤と情念の迷妄なのである。

ニーチェによるならばホメロスの空想の軽やかさはギリシャ人の過度に情熱的な心情と鋭すぎる理性を和げて一時の休息を得させるためになくてはならぬものであった。彼等の理性は誤りなく人生の苦酸、残酷を見抜いた。しかもそれと知りつつ人生を嘘で包んで戯れるところに彼等の芸術の役割があった。芸術は生の苦痛をまぎらわそうとする情念に成立するのである。しかもそこには現実の上に薄紗をかぶせる錯誤の迷妄が必須であった。例えば韻律は弁説の作為を助け思考の不純正をそそり立てる。それは思考の上に投げかける影によって隠したり浮き立たせたりする。このように芸術は不純正な思考の薄紗をかぶせることによって人生の容姿を見るにたえるものにするのである。芸術も亦錯誤と情念の迷妄によって成立する。例えば芸術特有の現象と考えられる天来の霊感なるものは大衆の錯覚で、芸術家が大衆を欺くために故意によそおうものに過ぎない。我々はあらゆる完全なものを見るとその生成の由来を問うのを止めて現在するものを楽しむのが習いである。完全な芸術作品の理念は、恩寵のように天から照し降される(herableuchten)と云う信仰がある。芸術家は大衆の奇蹟を好む錯覚を幇助することによってその作品の完全を信じるように嘯着しようとする。そのために創作当初の昂奮した不安状態や耳をそばだてる夢想などを霊感と称して芸術の中に持ちこむのである。天来の霊感は大衆の錯誤の迷妄に過ぎない。逆にこの霊感に恵まれる天才なる存在を作り出すのは大衆の虚栄心であるとも云える。人間の虚栄心、自尊心はこのように勝れた才能を天から恵まれた特別の才能としてのみ容認する。それを特別のものを見る時のみ競争する気が起らないのである。かく見る

ならば天才は大衆の情念の迷妄が作り出すものとも云える。大芸術家の着想にも常に傑作とならんで駄作、凡作が存在する。それを彼のすぐれた判断力が取捨選択するのである。大芸術家はただ創案するだけではなく、捨て去り、篩い分け、造り変え、整えることにかけても倦むことを知らぬ偉大な労務者である。天才は決して恩寵の人ではないのである。又屢々人は芸術作品におけるぬきさしならぬもの（das Notwendige am Kunstwerk）を口にする。これ亦錯誤の迷妄のなせる迷信である。芸術作品の形式というものは作品の思想に口を利かせるものであり、従って作品の物の云い方なのであるが、それはあらゆる種類の言語と同じように何時も何処かしまりのないところのあるものである。むしろ芸術においては、浮彫の像が壁から抜け出る途中で阻まれ停っているが故に一層空想をそそり立てるように、いわば浮彫風の不完全な表現が委曲を尽した表現よりも効果的な場合があり得るのである。又芸術家が人間の典型的な性格を創造すると云われる。これ亦錯誤の迷妄であって、元来人間の性格などと簡単に云うのがすでに皮相な誇張、一般化の結果なのである。まして芸術家の「創造した」性格には現実の人間の必然性はうかがうべくもない。芸術作品に典型的な性格を見るのは、現実世界においても屢々不自然な、単純化された人間像でことをすまそうとする錯誤の迷妄のなせる業である。又悲劇を見るのに快い涙を心ゆくまで流すことを欲していたとすれば、それは幻影を以って足れりとし、幻影に欺かれることを自ら欲していたものとして情念の迷妄のなせる業と云わなければならない。元来大衆は芸術には無理解なのが常である。傑作必ずしも味識されぬところに大衆と芸術家の不幸がある。しかしながら両者がこの不幸を避け、大衆が芸術に近づき、芸術が大衆に近づこうとする時、そこには必然的に錯誤と情念の迷妄が入りこまざるを得ない。最高の芸術作品、例えば神曲、ラファエルの絵、ミケランジェロの壁画、ゴチックの大伽藍も作者をも含めた大衆の宗教的迷妄に対する信仰なくしては成立し得なかったであろう。しかしながらこの場合迷妄の存在は芸術の偉大をさまたげていない。芸術の偉大は生の高揚にあるからである。芸術は形而上学、道徳、宗教が錯倒した生の迷妄を原理として強制するのと異り、生の高揚を端的に目指すものとして、迷妄の害に煩わされることのもっとも少いものと云い得る。

以上においてニーチェは形而上学、道徳、宗教、芸術のすべてにおける錯誤と情念の迷妄を摘抉した。しかしこの迷妄が生に必然なること、むしろその故に生の豊饒と偉大のあり得る所以をも認めるにやぶさかでなかった。彼の思索は生の迷妄を摘抉、批判する否定態から始まってそれの生における役割を理解する肯定態へと進んでいる。否定態から肯定態へとは云ってはそれは勿論ニヒリズムからオプティミズムに移ることではあり得ない。単なるニヒリズム、オプティミズムこそ迷妄の最たるものであろう。彼のとった道は生のより深所に即しつつ迷妄を直視しようとする志向である。彼の迷妄呼ばわりは時として恣意の行き過ぎからそのすべてが当を得たものではあり得ないかも知れないが、あらゆる因習を打破して生を直視し、その上で独自の否定と肯定をなす遠近法的視野を展開しようとする試みの内には彼の生の自覚の深化がうかがわれる。それは従来の伝統的な学的立場とは全く異る生の立場を確立しようとする努力である。この書においてニーチェは自己の立場の確立に専念するところからカントにふれる場合も学説批判と云う同じ土俵においてはなされない。それは生の立場をはなれて学の立場につくことになろう。むしろ自己の立場の充実の努力、立場対立場の戦の内に、学的世界観、理想主義的道徳のチャンピオンたるカントに対する間接の批判がなされていると見るべきであろう。かく見るならば形而上学、道徳、宗教、芸術の何れに関してもカント批判に枚挙の暇なしと云える。ここではっきりとカントの名指された三つの場合について述べる。その第一においては数の法則が発明されたのは、幾つかの同じ物がある、或は少くとも物があると云う迷妄に基くと説いた後に、「カントが『悟性はその法則を自然から掬みとるのではなく、自然に対して法則を定めてやるのだ』と云うが、これは自然と云う概念に関しては完全に真実である。我々はこの概念を自然と結びつけざるを得ないが（自然―表象として、つまり迷妄としての世界）、これは一群の悟性の迷妄の集積なのである。我々の表象でないような世界には数の法則は全く適用出来ない。これらの法則はただ人間世界でのみ通用するものである」と述べている。ここにおいてニーチェはカントの所謂コペルニクス的転換を承認しているが、それは Natur=Welt als Vorstellung, das heisst als Irrtum 或は又 die Aufsummierung einer Menge von Irrtümern des Verstandes と云うニーチェ独自の自然の概念に照して（in Hinsicht auf den Begriff der Natur）認めているのである。自然とはすでに悟性の迷妄の集積なのであるから悟性がそこから法則を掬むのではなく、そこに法則を定めるのであることはあたかも数に関する錯誤の迷妄あって数学の成り立つ如く

であると云うのである。ニーチェの強調は迷妄の強調にある。一見カントを承認するに以てそれはあくまでも自己の立場よりなすものであって、それは暗にカントが錯誤の迷妄の自覚なき「真理」信仰の立場、学の立場の楽観主義に立つことを示すのである。第二には神が世界の運命を導いて遂には人類を救済すると云う信仰が衰えた後には人間自身が世界普遍の目標を立てなければならなくなったと述べた後に「古風な道徳、特にカントの道徳は万人に求めるような行為を個人から求める。これは仲々無邪気な話だった。まるでどうゆう行為をすれば人類全体が仕合せになるか、従ってどうゆう行為が一般に望ましいかを夫々の人間が何の造作もなく分るとでも云うような話だ」と述べている。カントの道徳が、万人に求めるような行為（Handlungen, welche man von allen Menschen wünscht）を個人から求めることは善の尺度を普遍妥当性（Allgemeingültigkeit）に置くことである。学の立場に立って道徳を論じたカントは結局「汝の行為の格率が汝の意志によって普遍的自然法則となるかのように行為せよ」との命法を最高の道徳律とせざるを得なかった。この命法の底には認識の基準を以って道徳の基準となそうとする、即ち「真理」信仰に「道徳」信仰を基かしめようとする安易さがある。その道徳説が学的に如何に精緻であり得ても内容空疎を免れないのは「如何にして認識は可能であるか」との問の方式をそのまま「如何にして道徳は可能であるか」との問に移して怪しもうとしないカントの態度、約言すれば根本的に生の自覚を欠いた態度に起因するのである。この故にニーチェは普遍妥当性を尺度とするカントの道徳を無邪気なものと笑い「将来人類の様々な慾求をあまねく見渡せるようになったら、万人が同じ行為をすることなどは恐らく少しも望ましいこととは見えないだろう。むしろ世界普遍の目標のためには人類のすべての地域に対して夫々特殊な任務、事情によっては悪い任務さえも負わされるのが本当かも知れない」と揶揄して普遍妥当性の尺度に代るべき遠近法的視野を暗示する。第三には蒙昧主義（Obskurantismus）は精神の啓蒙を妨害することによって成されるが、逆に過度の精緻によってその成果にうんざりさせることによってもなされ得ると説いた後にカントが「知にその限界を示すことによって信仰に道を開こうとした」と云う時、それは蒙昧主義の利するところとなるおそれはなかったかとの疑問を提出する。即ち生の自覚なき学の立場の精緻はかえって蒙昧主義、この場合には宗教の迷妄を助けるものではないかとのカント批判である。ニーチェの生の立場は成程学の立場とは相容れないがそれは決して理性を否定する立場ではない。むしろ生の自覚に立った理性を最後の拠り所とする立場である。この生に根ざした知はカントの言表のように信仰のためにしかも容易に己を制限し得るものではないのである。以上三つのカント批判は学的精緻の陰にかくれた生の無自覚を、認識、道徳、宗教の三分野に即して摘抉したものと云えよう。「人間的な、余りに人間的な」においてニーチェは前述のとおり主として生の迷妄の底を直視する自己の生の立場の確立に専念しているが、そのカント批判の寸言も生の立場の充実につれて次第に正鵠を射る鋭さと所説の重量感を増して来ているのが感ぜられる。

（未完、原文引用に当っては阿部六郎氏訳を借りた）